北方山草（36）：73-78. March 2019

小泉秀雄のトカチフウロ

札幌市　本多　丘人

はじめに

筆者は週１回、北大総合博物館で「植物ボランティア」をやっています。北大総合博物館陸上植物標本庫（SAPS）には 40 万点を超える標本があり、それらは実物があったという唯一の証拠品なので大切に保管されているわけですが、新しい標本が持ち込まれる一方で、実はまだ古い未整理標本がたくさん残されています。植物標本の整理とは、標本を確認して決められた棚に配架する作業です。簡単なようでも時には台紙に貼ったりラベルを作ったり学名を確認したりと、かなり手間ひまがかかるので、分担して仕事を進めています。本来なら標本整理の専従職員が配置されてしかるべきですが、北大ではそのような人はいないので、高橋英樹教授（本会会長）の指示を仰ぎながら、作業はほぼボランティアが行うことになります。古い植物標本を整理していると、たまに「お宝」や「変わりもの」が出てくることがあり、本稿では作業中に見つかった１枚の標本を紹介します。

拓本も標本？

2018 年 10 月、「トカチフウロ」「H.Koidzumi」と記載のある植物の標本がみつかりました。通常、植物の標本は押し葉（腊葉さくよう）標本なのに、その標本の大部分（茎や葉）は拓本であり、一部に花の標本が貼り付けてあります（図 1）。台紙にスケッチが描かれている標本を目にすることはありましたが、ボランティア歴わずか２年の初心者（筆者）にとっては、このような標本は初めてです。

拓本は、元々は皆さんご存知のように石碑などの型を紙に写しとるもので、中国で 2000 年前に生まれたコピー技術です。この技術がヨーロッパに伝わり、植物にも応用されるようになりました。レオナルド・ダ・ヴィンチ直筆の「アトランティコ手稿」（1508 年ごろ）にはセージの葉の拓本とともにその製作法が示されています。

江戸時代後期、ドイツでクニホフ（Johann Hieronymus Kniphof、1704-1763）が刊行した「Botanica in Originali」の改訂版（1747

図 1　トカチフウロ標本（全体）2018.10.4